



## 伊豆沼堤防において野焼きが行われました

Vol.106  
平成31年4月号

平成31年3月23日に、伊豆沼周辺の堤防において野焼きが行われました。堤防は、背丈の高いヨシ原になっていて、多種多様な湿生植物が生育し、魚が産卵を行う場所です。また、オオヨシキリなどの鳥、タヌキ、キツネ、ノウサギといった動物の住み家となっています。しかし、そのまま放置しておくとなガキなどの樹木が入り込み、見通しの悪い林になってしまいます。このような林には、ヨシ原に住んでいた生き物の多くは、住むことができません。また、見通しの悪い林は、ゴミの不法投棄が行われやすい場所でもあります。そこで、ヨシ原を維持するための管理が必要です。野焼きは、大規模なヨシ原を維持するには最も効果的な手法です。芽吹く前のヨシ原に火をつけ、枯れ草や侵入した樹木の若木を焼いてしまうことで、ヤナギ林になってしまうのを防ぐ効果があります（これを遷移の退行といいます）。枯れ草が焼かれた後のヨシ原は、地面まで日光が届くようになります。また、炭はヨシ原に生育する植物の肥料となります。そのため、野焼きを行っているヨシ原は、品質の良好なものとなります。

ヨシは、ヨシズなど様々な道具の材料として、人々に利用されてきました。しかし、石油製品の普及と共に、ヨシの利用は廃れてしまいました。そのため、野焼きも各地で行われなくなり、良好なヨシ原は減少していきました。しかし、利用する生物が多く、水辺を代表する景観を作るヨシ原の衰退は、漁業や観光など、様々な方面に予期しない悪影響をもたらしました。現在では、維持管理のため、野焼きを復活させる試みが各地で行われています。



着火作業



焼却後のヨシ原



伊豆沼3工区の野焼き

## 第60回 伊豆沼・内沼クリーンキャンペーン

3月21日（木）（春分の日）に第60回伊豆沼・内沼クリーンキャンペーンが開催されました。周辺地域の方々や地元企業から、総勢984人に参加いただきました。未就学児から年配者までが、各サンクチュアリセンター3会場に集合し、8時半から90分ほどで約570kgのゴミを拾い集めました。伊豆沼・内沼周辺には、紙くず、空き缶のほかに、扇風機、電子ジャー、電子レンジ、テレビ、古タイヤが捨てられていました。多くのボランティアの活動によってきれいな沼辺を取り戻すことができました。



参加者が集合



集めたゴミを分別



見つけたゴミを拾い集め



地元の生徒も参加

今回で60回、多くの方々に支えられ、ゴミの量は年々減少しています。皆様のご協力に感謝しております。

## 「第8回全国タナゴサミットin 栗原」が開催されました



伊豆沼・内沼で復元しつつあるゼニタナゴ

タナゴという小魚に焦点をあてた全国サミットが、栗原市金成のほたるホールで2月24日に開催されました。大阪府や千葉県など日本各地から数十名が参加し、12件の発表がありました。タナゴ類は在来種の約9割が絶滅危惧種に指定され、各地で保全活動が取り組まれています。今回のサミットでは、大阪府の高校生から「水の中にいる二枚貝の復元に山砂が有効！」など、ちょっと意外に思えるユニークな成果などが報告され、良い情報交換の機会となりました。

## 伊豆沼・内沼生きもの図鑑 ハクチョウの北帰行

ハクチョウの北帰行が終わりましたが、今冬は1月下旬からはじまって2月中旬にはほぼ終わるといいう早いものでした。宮城県では11、1、3月の年3回ガンカモ調査を行っています。1月と3月のハクチョウの個体数を比較して、減少率が高いほど春の渡りが早くすすむとし、その割合と2月の気象条件の関係を15年分のデータからみましました。すると、降雪量が少ない年ほど減少率が高い、すなわち北帰行は早くすすむということがわかりました。今冬はまさにそういう年だったのです。

泥中のレンコンやマコモの地下茎を採食するため、土の鉄分によって頭が茶色になったオオハクチョウ →

